

心をよつめる。

その五

北九州市内・近郊の寺院の僧侶にお言葉をいただくコーナーです。老後を心豊かに生きるためのヒントとなりますように・・・。



人間の心は6番

今から二千数百年前、お釈迦さまがお亡くなりになった後、インドのお坊さん方はお釈迦様の教えを分かりやすく説明するために、人間の心を6番としました。人には五感があります。五感のそれぞれに対応する心があると考えました。目という感覚器官から送られた情報を処理する脳の中のある部分、これを1番の心としました。同様に耳・鼻・舌・身体を通して伝わってくる情報を処理する脳の部分を、2番から5番の心としました。もちろんこの当時の人は、脳の中にこのような部分があるとは知らなかったでしょう。しかし人間の身体の中には、そのような働きをするものがあると言うことで、番号を付けました。人は五感を通して外の世界を知ります。それで人間の心は6番となりました。

では何故このようなことを考えたのでしょうか？ 仏さまの教えとは、私

たちの苦しみ・悩みを解決するためにあります。私たちの本当の苦しみ・悩みは「私の死」ですが、多くの人にとって今日・明日という切迫した問題ではありません。すると当面の問題は外との関係となります。例えば「対人関係がうまくいかない」「自分の欲しいと思っっているものが手に入らない」「自分の親しい人を亡くす」などです。「これをどう解決するか」ということで、その前に「人は外の世界をどういう風にして捉えているのか」そこから考えていったので、こうなったのです。そこで人間の心を深く観察して、6番の心の奥に7番の心があるとししました。この7番の心は、自分中心の心。自分が一番かわいいと思う心・自分と自分以外のものを分ける心です。これ



真宗興正派 光峯山 興泉寺 住職
伊井 涼州(りょうしゅう)さん

「年に6回、ビデオを見て住職がお話をする会があります。ご興味がおありの方は、お問い合わせ下さい。」



興泉寺
北九州市若松区古前 1-12-16
TEL 093-761-1615

が人間の欲の根元・迷いの元です。しかしこの7番の心は悪い面だけではなく、同時に人が生きていく意欲と関わっている大事な心です。6番・7番の心は理性と本能・立前と本音とも言えます。私たちは6番と7番の心のバランスをとりながら、折り合いを付けながら毎日生活しています。

ここでお念仏の話になります。私たちは、お釈迦さまのように修行をして悟りを開くということが、なかなかできません。そこで阿弥陀如来さまという仏さまが、そういう私たちのために代わりにご修行をなさって、その成果を「南無阿弥陀仏」という六字に込められました。私たちはそれをそのままいだけ「なむあみだぶつ」と称えれば、そのまま救われる。そういう有



お寺の御宝

姫路にある真宗大谷派のお寺のご住職 鷲野 暁様がお書きになった「御名号」。ご住職が大変お世話になった方で、「南無阿弥陀仏」の六文字が書かれています。

難しい教えだと言われます。しかし、私たちが本当に悲しい・つらい・苦しいときお念仏を称えても、特別何か救われたとか、今かかえている問題の解決の糸口が見つかるなど、ふつうはまず何も起こりません。なぜ救われたという気持ちにならないのでしょうか？
(次号に続きます。)